

「星の歳時記」に出会って

畑 中 至 純

どうして天文学をやるようになったのか、という質問を天文学専攻でない人からよく受ける。世間で数少ない職業ほど好奇の目で見られ、詮索ずきの人の心を刺激するものであろうが、私の天文学に限らず、今の職業をどうして選んだかという質問に明確に答えることは難しいように思う。どうして難しいかと言うと、職業の選択が人生の重大事と考えられているから、誰れもが慎重に自己の道を決めているはずなのに、実際迎っている道は試行の段階のそれと全く違うことがあって、質問者を納得させようの答えを用意できないためである。たとえば、いとも簡単に天職を決めたり、その動機がひょんなことがらであったり、わが意に反し周囲の状況から止むを得ずその職についたり、という工合に。こんな職業決定法をやった人達にとって、さきの質問に答えることは、大変難しかったり、てれくさかったり、またひよっとすると答えにくいのみならず、答える側の恥さらしになることがありそうだ。これから述べるのは、私の一生のテーマを決める上で大きな働きをしたある小冊子の紹介と、どうしてその本がそのような働きをしたかのお話であるが、恥さらしの点はお許し願いたい。その本は石田五郎著「星の歳時記」(文芸春秋新社発行)である。

終戦後の混乱期に東北の田舎小都市の小・中学生であった私にとって、お星さまも天体望遠鏡も無縁のものであった。中学生の頃、親友が作った小さな天体望遠鏡で五・六百メートルさきの消防署の望楼をのぞいたのがたった一度の望遠鏡との出会いであって、レンズの収差で色のついた望楼がすぐ近くに逆さに見えたことを今でも覚えている。望遠鏡には無縁でも、近所の時計屋のウィンドーにならべてあった顕微鏡には少なからず興味もっていた。ほしくてほしくて仕方がなくなり、だいぶたってから、長い間かかってためた小遣で買い求めた。それは当時の中・高校生にはすぎた品であった。

高校生生活を終え、あこがれの大学に入っても、顕微鏡との関係は意識の上で続いていた。ところが大学2年の半ばにして病いの宣告を受け、断腸の思いで若人の熱気あふれる大学と学寮とを去らなければならなくなった。落ち行く先は、療養の町として名高い清瀬町のある大きな療養所であったが、当時結核治療は抗生物質による化学療法時代を迎えて、不治の病として恐れられるこ

ともなくなってきた、患者の顔も明るかった。しかし療養所には十年選手と呼ばれる古い患者が社会復帰をめざして闘っていたし、その闘いにも敗れ淋しく世を去っていく人がまた幾人もいた。武蔵野の林の中に、長い廊下でつながれた木造平屋建の病棟は四季の変化をそのままに受け、自然が与える恩恵に満たされていたが、そんな病棟の大部屋の一つのベットに横たわって読んだのが、この「星の歳時記」である。書見器という手を使わずに寝ながら本がよめる便利なもののお世話になって読んだ。その本は療養所文庫の一冊であったから、薄茶色の表紙がかかっている、手あかでかなり汚れていたと記憶している。私の所蔵しているのは、1963年の新装のポケット判であるが、旧版は1958年に出て、全書判である。はじめて読んだ旧版の方にいまでも愛着を感じる。

前述の如く、星と無関係であった私は勿論星座の名前すら知らず、その本に書いてあることはすべてが新しいことばかりであった。従って一晩で一氣に読んでしまったのではなく、随分と時間をかけてゆっくり読んだように思う。文学的センスをもちあわせていない私のことであるから、文章のうまさだけが私を魅惑したのもあるまい。また、内容を全部理解できる程の常識を持ち合わせていなかったのも、わからないことも多かったであろう。とにかく私の心の空虚なある部分を満たすのに大変役立った。そしてこの本の後には、野尻抱影著「新星座巡礼」、「星と伝説」を読むほどの私にしてしまった。春になって戸外へ出ても寒くなくなった頃、始めて意識して星空を仰ぎ、星座を知ろうとしたときの思いは、今も憶えているような気がする。春の夜空で始めておぼえたのは獅子座であった。そして美しいと思ったのは肉眼でぼんやりと見たかんむり座(コロナ・ボレアリス)——まるで宝石をちりばめたような姿がなんとすばらしかったことか——であった。この本は遂に星空をみることの喜びまで私に与えてしまっていた。

さて、大学へ戻った私は丁度専門課程進学の志望決定時期を迎えていた。成績のいい連中は志望したところに必ず行けるが、そうでない者は他人の志望状況を見ながら自分はいれそうなところをねらった。後者に属していた私には、一年前ならとも考えなかったであろうところに気持が向いて仕方がなかった。妨主頭の小・中学

生時代の顕微鏡への憧れは思い出の彼方へとおしやられ、えんもゆかりもなかった天体望遠鏡へと思いは向って行った。そして、物理の不得意なるのも考えずに敢然として天文学コースを選んでしまった。

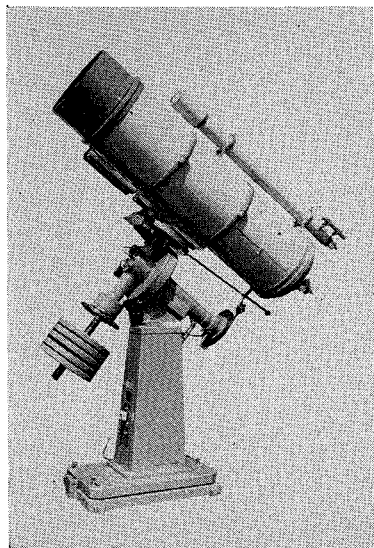
思えば、この一冊の本「星の歳時記」は罪つくりな本であると言えるが、私を一つの道に導びき入れたすばらしい書物と考えることもできる。だいが私事にわたることを書いてしまったことをおわびしたい。

ここでこの本の内容にも少しふれておこう。この本は四季おりおりに眺められる星座、惑星、そして天文用語とを説明した53篇からなっていて、各篇は500~800字の短い文章と挿絵とからできている。またこの53篇は大きく春、夏、秋、冬、雑俎(ざつそ)に分けられている。もともとは朝日新聞に一年間連載されたもので、まとまって本になった。普通の星座ガイドブックは星座の見つけ方、ギリシヤ神話、学問の対象としての説明等からなっているが、この本は著者が述べているように「星空を眺めてつづった小文」であるため、前述のもの、グラスアルファーをのせている。そしてそこから著者の星空への愛情が読者にあたたく伝わってくる。たとえば、いつ・どこで・どのような思いでその星座を眺めたのであったかとか、どんなときに眺めたらその星らしい感じが出るのか、といったようなものである。これらブ

ラスアルファーが強い印象を与えるので、随筆と呼んでさしつかえなからう。幾百年、幾千年にわたって、私たちは同じ星空を仰いで来た。おそらく同じ思いにふけたことも少なくないであろう。そんな思いの一つがこの本に書かれている。現在の星座の名前、語りつがれた数々の星の伝説の中に昔の人の喜び悲しみを見出し、共感をおぼえるように、この本に共感を懐くのも私ひとりではあるまい。もしもいま、人里離れた山奥か南海の孤島に独り暮らし、毎夜星空との対話ができる生活が与えられたならば、私は四季おりおりの星々に自分で名前をつけ、言葉をかけることであろう。そしてそのための参考として、この本をひもとくことであろう。

昨今は、大都市はおろか中小都市に至るまで、星空がなくなってしまった。まして「四季の星座の匂い」などは妙な刺激臭によって消されてしまったが、自然界が与える恩恵は、次の世代は勿論のこと、永久に残しておきたいものである。天文の本とか星座のお話の本を読みたがっていた知人にこの本を薦めたことが何度かあったが、世に出た数々の天文に関するよき書物と共に、「星の歳時記」も長く読みつがれてほしい書である。この本が世の人々に星空の美しさ・星空の匂いを語って、人々の心に美しさがましくわわれれば望外の喜びである。

(東京天文台)



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|----------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリュース大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580